

帰還する南方徴用作家・序説

——尾崎士郎「朝暮兵」・火野葦平「敵將軍」

松 本 和 也

I

太平洋戦争開戦前夜の昭和 16 年 11 月、多くの文学者が国民徴用令に基づく白紙徴用をうけ、後に戦場となる南方各地へ送られ、文化工作に従事していく。これが文学者の南方徴用であり、《作家が大挙して徴用され、軍隊に所属して軍務につくなどということは日本の文壇史にとって未曾有のこと⁽¹⁾》だという位置づけのもと、研究が蓄積されてきた⁽²⁾。まず、先行研究からその概要を確認しておく。

アジア太平洋戦争勃発の直前、「国民徴用令」によって多数の文化人、文学者、ジャーナリストたちが陸海軍の報道班員として「徴用」され、南洋・南方の各方面に送られた。文学史の上で「南方徴用作家」とよばれる七〇人余りにもものばる作家たちは、現在の東南アジアを中心とした各地での「南方作戦」に従事し、日本軍が統治した地域での宣撫・宣伝活動に従事した。具体的には、日本語の普及を中心とした「対占領宣伝」、戦意高揚と聖戦思想の普及を目的とした「対軍隊宣伝」、さらには対敵放送の原稿作成といった「対敵宣伝」（神谷忠孝「序論」、神谷忠孝・木村一信編『南方徴用作家』所収 世界思想社平 8・3）などが「徴用作家」たちに課せられた主な仕事内容であった。また、現地にあつて、あるいは任務をおえての帰還後、それらの現地で体験・見聞をもとにエッセイや紀行文・ルポルタージュ、小説や評論、詩などを新聞や雑誌に発表し、単行本として刊行したりもした。⁽³⁾

こうしたスケールの大きさ、問題領域の複雑さ、そして太平洋戦争に関わるイデオロギー的難問ゆえに、南方徴用作家についての研究は、その重要性にみあったかたちでは進んでいない⁽⁴⁾。《『南方・南洋』に関する文学の総合的研究が決定的に欠けている》と指摘する土屋忍は、次のように述べている。

かつてこの分野は、基礎的な一次資料の収集と復刻作業を中心に活況を呈したが、現在ではその動きも落ち着き、アクセス困難だったテキストの多くは容易に読むことが可能になった。しかし、そうした環境を活かして全貌を見据えようとするアプローチはまだ現れていない。各人が各人の興味にしたがい、資料的発見を重ねて個別の研究を深化させる形で進展しているのが現状である。⁽⁵⁾

つまり、一次資料の整備は進み、個別の研究も蓄積されてきたものの、それらを総合するアプローチにまでは至っていない、という土屋の診断である。本稿もまた総合を企図するものではなく、その意味では個別研究の範疇にとどまる。ただし、本稿では総合化の際に欠かせない一面として、南方徴用作家による帰還後の作品とその受容にスポットを当てる。この点に関わって、亀井秀雄に次の指摘がある。

昭和十年代の——もちろんこの文学史上の時代区分を前提としてのことであるが——特徴の一つとして、わが国の文学者の他民族との接触体験が圧倒的に拡大した事実があげられるだろう。火野葦平や日比野士郎のような一兵士としての体験もあれば、大岡昇平のように、俘虜としての接触の仕方もあった。八木義徳や多田裕計のように、いわゆる外地の民間会社の社員としての接触もあったし、武田泰淳や堀田善衛のような上海生活の経験もあった。石川達三、丹羽文雄のような従軍ペン部隊としての体験もあれば、島木健作のように大陸開拓に積極的な関心をもって訪れた文学者、伊藤整のように大陸開拓文芸懇話会員として満支を旅しつつ、父の戦った日露戦争の山河を眺めてきた文学者もいた。小林秀雄のように、芥川賞を火野葦平にとどけがてら、ほとんど純粋な旅行者として大陸を見てきた文学者もいる。そして太平洋戦争の直前には、マレー方面、ビルマ方面、ジャワ・ボルネオ方面、比島方面、海軍関係と分れて、多くの徴用作家が動員された。実に多くの文学者が実に多くの土地を踏み、他民族と接し、何らかの形で見聞記録を残している。だが、その体験の全体が何をもたらしたのかは、必ずしも総体として整理されてはいない。⁽⁶⁾

上に亀井が掲げた《その体験の全体が何をもたらしたのか》という問いは、これまで深められる機会がないまま今日に至っている。そもそも、南方徴用とは、文学者にとって特異な体験だったばかりでなく、戦時下における文学者の社会的存在意義⁽⁷⁾や、内地における南方表象－認識にも関与していくなど、(太平洋戦争に関わるイデオロギー的批判以前に)同時代の視座からすれば、きわめて文化的影響力の大きいプロジェクト－営為であったはずなのだ。本稿は、こうした問題領域に照準をあわせる。

Ⅱ

本稿では、太平洋戦争開戦から1年後、次々と日本に帰還した南方徴用作家の随筆・報告文、創作、さらにはそれらが内地の文学場でどのように受容されていたのかに注目し、調査－分析を進めていく。まず、先行研究を参照して、南方徴用作家のリストを掲げておく。

マレー方面 会田毅(北町一郎)、秋永芳郎、伊地知進、井伏鱒二、大林清、小栗虫太郎、海音寺潮五郎、北川象一(冬彦)、小出英男、堺誠一郎、里村欣三、神保光太郎、月原澄一郎、寺崎浩、中島健蔵、中村地平

ビルマ方面 岩崎栄、小田嶽夫、北林透馬、倉島竹二郎、榊山潤、清水幾太郎、高見順、豊田三郎、山本和夫

ジャワ・ボルネオ方面 浅野晃、阿部知二、大江賢次、大木惇夫、大宅壮一、北原武夫、郡司次郎正、武田麟太郎、富沢有為男

フィリッピン方面 石坂洋次郎、上田広、尾崎士郎、今日出海、沢村勉、柴田賢次郎、寺下辰夫、生江健次、火野葦平、三木清、山上伊太郎、安田貞雄

海軍関係 浅見淵、石川達三、井上康文、海野十三、鹿島孝二、角田喜久雄、北村小松、木村莊十、倉光俊夫、齊藤良輔、桜田常久、寒川光太郎、沢田謙、柴田賢一、撰津茂和、多田裕計、田中克己、坪田譲治、戸川幸夫、中山善三郎、中山義秀、丹羽文雄、新田潤、浜本浩、半田義之、久生十蘭、堀川潭、間宮茂輔、湊邦三、村上元三、山岡莊八、蘭郁二郎⁽⁸⁾

こうした70名あまりにも及ぶ文学者の南方派遣は、文化工作－思想戦の兵士として文学者(文化人)を活用しようとするものであった⁽⁹⁾。陸軍報道部長の谷萩那華雄は、《大東亜戦争になりましてから執りましたこの徴備制度といふのは、まづドイツのPK即ちPropaganda-Kompanien der Wehrmacht(国

防軍宣伝中隊)の真似をした、といつても差支へありません》(谷萩那華雄・尾崎士郎・阿部知二・榊山潤・神保光太郎・加藤重雄「戦争と作家(座談会)」、『文芸』昭18・1, 126頁)と証言している。

太平洋戦争開戦後、ジャーナリストによる戦争報道とあわせて南方各地へ派遣された文学者たちによる各種報道文が内地に届けられていった⁽¹⁰⁾。なお、昭和17年に発表された、現地に取材した創作として、火野葦平「兵隊の地図」(『時局雑誌』昭17・6／単行本『兵隊の地図』改造社、昭17)、「花の街」(『大阪毎日新聞』・『東京日日新聞』昭17・8・17～10・7／単行本『花の町』(改題)文芸春秋社、昭18)、丹羽文雄「海戦」(『中央公論』昭17・11／単行本『海戦』中央公論社、昭18)・「報道班員の手記」(『改造』昭17・11／単行本『報道班員の手記』改造社、昭18)などがある⁽¹¹⁾。

本節ではまず、昭和17年末に催された2つの座談会から、当時の問題構成を確認していく。

第一は、尾崎士郎・石川達三・富澤有為男・大木惇夫・浅野晃・藤田嗣治・宮本三郎・向井潤吉・猪熊弦一郎・山口蓬春「一年の収穫 陸海報道班員派遣員座談会」(『改造』昭17・12)である。座談会冒頭で、記者から《これからの日本の文化建設といふ問題を中心に御意見を承はれば結構だと思ひます》(134頁)という論点が表示されるが、出席者は南方徴用から帰還した文学者・画家たちである。文学者の発言としては、石川が《今度従軍した文学者といふものは、国家にたいして、一般に文学者として貫いた、しかも軍徴用の意味を相当果してやつて来たと思ふのですね、実に立派に……。》(136頁)と言明するなど、太平洋戦争下において文学者がいかに貢献できるかが、問われる以前から意識されていたようだ。尾崎は、自身がフィリピンに派遣された体験－現実認識を重視し、次のように文学者の存在意義を主張していく。

それから此の報道班の仕事といふものがどこにあつたとか、それから宣伝機構がいいか悪いか、そんな問題は夙々に消えて了つてゐると思ふ。それよりもつと大きな意味で、日本の文学がわれわれの体験の中に何か一つの道を切り拓くであらうといふことは、われわれが確信をもつて謂ひうるといふことです。僕等の感情の中に今まで想像もしなかつたやうな現実の中に自分をハッキリ見出して来たといふこと、これですよ、こいつが一番大きな問題ぢやなからうかと思ふ。(136頁)

また、帰還した文学者がどうすべきかについては、次に引く大木のような精神論が目立った。

挺身するよりほかにない。最早理窟はない。挺身するといふ精神において、その熱情において、その個人の熱情が誰かの精神に慇へるところがあれば、又それが他に点火して、やがて澎湃として出て来るもの、さうして次の文化は出来ると思ふのだ。いくら理論を言つてみたつて始まらぬ。文学のやるべきところはそれだ。黙々として他の何もやらずに唯それのみをやれ。それが文学の使命だと思ふ。(150頁)

精神論ゆえに正論でもある上の言明は、しかし、これ以後具体的な作品として問われていくだろう。

第二は、谷萩那華雄・尾崎士郎・阿部知二・榊山潤・神保光太郎・加藤重雄「戦争と作家(座談会)」(『文芸』昭18・1)である。この座談会は、掲載誌の無署名「編輯後記」で、次のように紹介－意味づけされていた。

★永い日本の文学史にも嘗てない最初の国家的任務を帯びた緊張に顔を硬くして従軍して行つた多数の作家たちが、めでたく任務をはたして続々帰還してくる。貴い戦地体験を通じてなしとげられたにちがひない作家的成長——文学者としての責任の自覚は、当面の激しい思想戦のためのより一層強力な武器として、そしてこのことが日本文学の正しい継承と画期的な発展のための肥やしとし

て、必ずや見事に結晶するであらうことをわれわれは期待し確信するのである。〔略〕比島の尾崎士郎、ジャワの阿部知二、ビルマの榊山潤、昭南の神保光太郎の四氏が陸軍報道部長谷萩大佐と膝をまじへてその収穫を披瀝するとともに、長期決戦下における文学の指針と文学者の決意について語り合つた。谷萩大佐の構想と作家四氏の直観との掛算からは多大の示唆を与へられる、新春辟頭熟読すべき座談会たるを疑はない。(144 頁)

ここで帰還作家が提示した論点は、主に3つである。

1 つめは、軍隊と文学（者）との関係である。尾崎に、次の発言がある。

こん度の戦争で私たちが体験したことは、われわれが軍隊といふ組織の中にはいつてしまったから、その制約の中で文学者の精神が何か窮屈なやうになつた感が外から見るとありますけれど、しかし文学者の本来任ずるところはゼロである。無である。その無の境地が文学の絶対境であると私は思つてゐますから、軍人が政治に入つてゆくにしても、その他の文化工作をやるにしても、軍隊といふ組織の中においては無だと思ふ。〔略〕ほんたうの意味の軍政といふものは、一貫したかたちで強力に何か突き抜けてゆく。その突き抜ける力が軍政の方式だと思ふ。そこへ、文学者の求める理想と文学者の懐いてゐる抱負が必ず一致しなければならないものだらうと思ふんです。(121～122 頁)

論旨の迫にくい発言だが、軍隊組織の中で文学者はいたずらに自己を出すことなく、軍政の中で文学者としての理想と抱負を一致させるべきだ、という報道班員としての言明である。さらに、尾崎は《特に軍人の偉い人に逢ふと、自然に何か無言の裡に通じてゆくものがあるやうな気がします》(122 頁)と付言し、文学者と軍人との相互理解の回路を見出していくが、同様の見解は榊山によっても示される。

僕は航空部隊で非常に大事にして貰つて愉しかつたのですが、何か文学の感性といふものを将校の人たちは皆もつてゐるのですね。日本の文壇のことなどは何も知らないのですが、根本の文学感性といふものはつきり持つてを、さういふ点で僕らと非常に話が合つたのですね。〔略〕ある意味で、戦争と文学は、同じ様な面をもつてゐるんじゃないかといふ感じが始終してをつたのですね。(122 頁)

ここでも、文学者と軍人との通底する《ある意味》という回路が、実感的に想定されている。これを裏返せば、文学（者）もまた、軍隊（軍人）と同様に戦争に貢献しうる、というアピールでもある。

2 つめは、《文士として日本人について感じたこと》として阿部知二が強調する、《日本人が日本人としての表現が貧しいといふこと》(132～133 頁)についてである。阿部は次のように主張している。

要するに、われわれが内容のない民族ならば、それは表現なんといふものははじめから相談にならないけれど、内容がありながら、まだその内容を十分に表はしてゐないといふ。それはさつき申しましたやうに、アメリカなりイギリスなんといふものは、内容以上に自分を売り立ててゐると思ひます。〔略〕自分といふものを見出して、自分といふものを過不足なく表現したならば、それは他人に通ずるに違ひない。支那人にも南洋の人にも、亦広くいへば世界の人にもハツキリするに違ひないと思ふのですね。(139 頁)

ここで阿部は、英米を対置しながら日本（民族）の表現を問題化し、自己表現を通じた世界との交通を目指している。また、ここでクローズアップされた《自己・自分》は文学者の創作にも関わる。

最後に3つめとして、今後の文学者のあり方も議論された。《文学者といふものは文学そのもの、詩人は詩、歌人は歌、小説家は小説に籠城し過ぎる》、《何かこれらの人がほかの文化部門との協力提携、更に進んで渾然一体になるといふところまでの努力が足りない》という不満をもらす谷萩が、《文化におけるあらゆるものが渾然一体となつて、一つの効果をあらしめるといふやうなことは出来ないものですかね》（142頁）という要望を示したのに対し、尾崎は次のように応じている。

それはまあ、いろいろ作品の上にもさういふ気組は徐々に現はれてゐると思ふのですが、これからでせう。作家の多くのものが前線に征つてをりまして、前線生活といふものはむしろ文学者の生活を離れた生活なんで、いろいろな体験をして来てゐますから、この容易ならざる体験、こいつを活かすことが恐らく今の谷萩大佐の言はれた希望と一致するものになつて現はれて来るだらうと思つてをります。（142頁）

つまりは、南方徴用による《前線生活・体験》が、文学者に確実に変化をもたらすだろう、というのが尾崎の見通しである。それは、思想戦の兵士たるにふさわしい、戦う戦時下文化人の姿である。

ならば、帰還作家たちは、どのような作品を発表していたのか。昭和18年新年号に掲載されて話題になったのは、尾崎士郎「朝暮兵——一報道班員の覚え書——」（『改造』昭18・1）、榊山潤「武魂」（『文芸』昭18・1）、上田廣「蒼生記」（『中央公論』昭18・1）、火野葦平「歩哨線」（『新潮』昭18・1）などである。まず、帰還作家に対して文学場で言明されていた、期待の地平を確認しておく。

たとえば、鬼生田貞雄は「文芸時評 理性と情熱」（『文芸首都』昭18・1）において、次のようにして帰還作家への期待と、その作品化までに要するであろう時間について論じている。

有名無名の作家が、大東亜の天地を環境として、実戦に従軍し、建設に挺身してゐる。それらの作家達が、ほんたうの仕事をするのは帰還して何年後に現はれて来るものか。二三年前から、私たちはいろいろと、それらの現地報告的文学に接して来たが、それらの多くは現象を追ふことに終始してゐる。しかしそれはほんたうの力を出すべき時機が来てゐない証拠であつてそれらの作家が体験して来た生命の眞実性を自己の作品に充分生かしきるまで、意識下に温めて置かねばならぬ珠玉である。

地熱（上田廣）、海戦（丹羽文雄）等の作品が問題視されてゐるやうであるが、それらはやはり直感的現象報道文学の域を脱してゐない。脱し得る筈がないのである。それは昨日蒔いた種子に今日花を求めるやうなもので、求める方が無理である。〔略〕真に時代を理解し、その中へ真に己れ自身を絶対の安心をもつて置くことが出来るやうになつたとき眞の日本の文学が生れて来るに相違ない。（51～52頁）

ここでは、体験を作品化するためには自己省察のための時間が必要だとされ、逆にいえば、南方徴用作家に成果を求めるのは時期尚早だという判断が示されている。同様の見解は、先に論及した「戦争と作家（座談会）」（前掲）において尾崎士郎も、《われわれが一ケ年の間に体験して来たことから、無論将来にたいする動きを決定する原動力になる作品が現はれて来なければならぬものだと思つてゐるのですが、しかし今のところでは、まだ作品の上に現はすといふやうに急速にやり通す時期でない》（141頁）と示していた。その尾崎との対談「日本文学の現実——対談——」（『新潮』昭18・1）では、川端康成がルポルタージュ（報告文）も視野に入れて、次のように述べていた。

ルポルタージュの価値といふことになる、これは無論ほんたうの文学ではないでせう。日本の文学も外地や他民族を書くことになるので、考へてみて、よく言ふことだが、古今東西、外地や他民族を書いて第一流の作品といふものはないやうな気がする。戦争も現在の戦争はまだ本当の小説には書けないでせう。旅順くらゐが今書いていい。(32 頁)

こうした見解は、同時代においては支配的だったとみてよく、逆に「文芸時評 文学至上主義的風潮について」(『新潮』昭 18・2)の福田恆存のように、《現代に於いて、作家はかならずしも歌をうたひ、小説を書く必要はない》、《報道文学でなくてもいいではないか、なぜ、ただ報道ではいけないのか、戦争文学でなく、なぜ戦争記録ではいけないのか》(40 頁)という見解が示されることすらあった。

以下、尾崎士郎、火野葦平ら帰還作家による作品(受容)について検討していく。たとえば、先に示した評価軸に即して福田は、『蒼生記』、『歩哨線』、『武魂』これら三作とも、戦争を文学が蔽つた白々しさにどうしてもついて行けない』と批判して、さらに次のように詳論していた。

「武魂」のうちにある渥見少佐の挿話など事実としてそれだけで十分に人の胸を打つものであるにもかかはらず、低調に終つたのは、この作品を取扱ふ作者の職業的態度が忠実な記録者の謙讓に満足せず、といつてまたこれを醇乎たる短篇に仕上げるためには人間観照を徹底せしめる愛情に欠けてゐたからにちがひない。「蒼生記」の饒舌は戦場に於ける心理や感情を弄んでゐるやうな廻りくどいどうどうめぐりに終り、読むものに慥へものの空虚感を与へてしまふ。「歩哨線」はあたかも終結から仮設を編み出したやうな作為が目立つて仕方ない。かういふテーマを扱ふのにはもつとすなほな記述が望ましい。

福田は上記 3 作いずれに対しても、(戦争)報道にとどまらず(戦争)文学を志向した点について『文学至上主義的感傷に歪められた戦場を見ざるをえなかつた』と難じた。他方、「朝暮兵」について福田は『さすがに重量を感じる作品であるし、心理描写もかなり適格であるが、時にはこの心理の穿ちや感慨が註釈のやうにかへつて煩はしく思つた』(41 頁)と、手放してはならないものの一定の評価を示した。

この尾崎士郎「朝暮兵」は、当時、大きな注目と賛辞を集めた。海軍報道班員・丹羽文雄+陸軍報道班員・火野葦平「決戦と文学」(『文芸』昭 18・2)にも、次のやりとりがみられる。

丹羽 あれ〔丹羽「報道班員の手記」〕はモデル問題を起して方々で叱られたよ。僕は、是非とも海軍報道班員といふものは、まあ陸軍だつてさうだけれど、あちらでどういふ生活をしてゐるか、といふやうなことを記録といへば変だけれど、描いておきたいといふ気持ちで……、行く時から僕は報道班員の動きといふものを描くといふ気持はあつたな。

火野 それを今、尾崎さん(尾崎士郎氏)が何か書いてゐるだらう。「朝暮兵」……。

丹羽 あれは読んだ。

火野 報道班員はいろいろな者が来たわけだよ。だからいろいろなことがあつてね。これは書けば、大ユーモア文学が出来るといつてをつた。しかし、僕らあゝいふふうには書けないね。誰が書くかなあと思つてをつたら、尾崎さんが書き出したけれど、それでも相当遠慮して描いてゐるね。やはりよくない空気がある。しかし、さういふものは書いたほうがいいと思ふけれど、どうも僕ら書けん。君は「報道班員の手記」なんかよく書いたと思つたよ。(笑声)(113 頁)

つまり、南方徴用作家の日常を私小説的にモチーフとすることで、従軍する文学者である自分自身を省察した(ようにみえる)戦争文学が丹羽文雄「報道班員の手記」であり、尾崎士郎「朝暮兵」なの

だ⁽¹²⁾。上の対談には、やはり「朝暮兵」に論及した、次のやりとりもみられた。

火野 僕は、こんど沢山報道班員が行つて帰つて来たから、どういふものを書くかと思つて楽しみにしてゐるのだよ。

丹羽 尾崎士郎さんのは、面白いな。流石に立派だ。「朝暮兵」といふのは面白かつた。(114 頁)

丹羽をして《流石に立派》といわせしめた「朝暮兵」は、私小説作家の宮内寒彌にも感銘を与えたようである。《尾崎士郎氏の「朝暮兵」(改造)を読んでゐると、一昨年のあの頃、日米会談が思はしい発展も見せず、何か暗澹たる空気の漂ふ中に、多くの小説家達に「白紙令書」が下り、その人達が刀を持つてどこそこへ集り、そして、どこそこへ向つたと云はれた当時の一種悲壮な思ひがよみがへつて来て、感慨無量であつた》(42～43 頁)と当時を振り返る「文芸時評 或る暗示」(『新潮』昭 18・2)の宮内は、同作の内容にふれて、その紙背の尾崎の心境までを次のように読みとっている。

「朝に朝を迎へ、夕べに夕べを送る」

といふ尾崎士郎氏の辿りついた境地は、一年間の戦場生活の後、内地へ持ち帰へられたなにより貴重な土産だと思ふ。(44 頁)

また、浅野莊は「文芸時評 武装の文学」(『文芸首都』昭 18・2)において、《先づ戦地報道の文学では尾崎士郎氏の「朝暮兵」(改造)を興味ぶかく読んだ》、《大東亜戦に参加した作家がそれぞれの視野から新たな体験を作品にしてゐるのを注意ぶかく私は読んでもみてゐるのだが、この「朝暮兵」は、今度の報道文学の最たるもの》だと帰還作家の作品として高く評価し、次のようにつづける。

これは報道班員が内地から護送船団に乗つて基地に達するまでの、主として船内生活を書いたものであるが一連のある種の作品とはちがつて、ひとりよがりな気負ひこみがちつともなく、正直であり、余裕綽々としたユーモアが旺溢してをり、そのことから生々とその時その時の情景を炙がきだしてをり、また、一面には、もはや国民全般が理解しきつてゐる戦争の緊張の問題などに新しい尾崎氏らしい立場から釈明をくだしてゐるところなど、これは氏のひごろの作家にしては政治的見識を多分にもつてゐる態度が、対象物に負けないですすめられた結果とみるべきか。(37～38 頁)

ここで浅野は、小説としての出来にくわえ、尾崎士郎その人の戦争観まで含めて評価している。

その一方で、榊山潤「武魂」について浅野は《同じ報道の文学》であると分類した上で、《手際のいい短篇》でありながら、《戦場にたいする作家としてのほかの、凡人では捉へることのできない認識のしかたといふか、感受性といふか、さういふものにもつと氏の本領を発揮してもらひたかつた》(38 頁)と難じている。こうした評価(軸)は、「朝暮兵」へのそれと表裏をなしている。

一月後には、伊藤整も「戦争の文学」(『新潮』昭 18・3)で「朝暮兵」に論及する。《白紙応召をした作家や記者たちが、戦争開始前の機構の不十分な戦時生活の中にあつて、自分の心を正しく置かうと企てては、身の辺の瑣事のために足を取られて崩れ、崩れてはまた立ち直つて、次第に初めの予期とは違つた場所で腰を据ゑるに到る》、《その経過を書いてゐる》と「朝暮兵」を紹介する伊藤は、《叙述と作者の意志的な観念する力との交錯》によって《相当に難解な、特異な雰囲気を作り出してゐる》(51 頁)と評してモチーフに深く関わる作家性にも論及し、「武魂」とあわせて次のように論じていく。

この作者の仕事は、銃後の生活意識、文学者の純粋な意識を戦争の中枢神経に結びつけようとする

最も典型的なものとなつてゐる。その点では榊山潤氏の「武魂」もまたほぼ同様な姿勢を持つた作品であると言へるやうに思ふ。また力量や資質は様々に違つてゐても、多くの文学者の戦線からの報告的な作品にはこの態度に近いものが多く感じられる。(52 頁)

総じて、当然ではあはるが、太平洋戦争開戦後の文学場においては、戦時下であることと南方徴用体験をもつことが重い意味をもつ存在として、帰還作家とその作品は受容されていくこととなった。

Ⅲ

Ⅲ-1

昭和 18 年 2 月号の文芸雑誌には、先月号にも増して、帰還作家の作品が数多く並んだ。

第一に、さまざまなジャンルの作品を並べた「帰還作家特輯」(『文芸』昭 18・2)がある。この特集は、掲載誌の無署名「編輯後記」で、次のように紹介-意味づけされていた。

★芸術の世界にあつて作品活動の不活発ほどわびしいことはあるまい。何と言つても、多数の最も働きざかりの作家たちの不在は、昨一年間の文壇を生色なからしめてゐたことは否めない事実であつた。しかしこの一種の空白の一年間が、日本文学にとつて真の充実への一年間となるであらうことをわれわれは疑はなかつた。いま、赫々たる戦果の後に推積する皇軍将兵の労苦をともし、報道宣伝の使命と果して、しかも米英文化の正体を見届け、祖国の決意を更に烈しく決意して、作家たちの殆どは帰つて来た。そして、本来の活動を再び始めるべく、総力戦陣頭の一翼に勢揃ひしたのである。盛観ではないか！

★本号はその大半を費してそれら帰還作家の貴重な収穫を特輯した。——昨年ソロモン沖海戦記「海戦」を発表して戦争文学に大きな段階を画した丹羽文雄氏と、パターン攻略戦に従軍しつゝ「麦と兵隊」以来の逞ましい筆力を縦横に駆使した火野葦平氏と、云ふならば陸海戦記の双雄が、その従軍体験の交換のみならず、最近に於ける文学界の主要な課題のすべてについて所懐を余すなく披瀝しあつた。

この対談のほか、小説、詩、日記、随想と各ジャンルにわたつて十氏の豊富な執筆を得た。これを飾るに、従軍画家十氏の見事な戦場スケッチをもつてした。苛烈なる戦塵の裡に燦然と輝いてゐる日本の芸術精神の旺盛を心から慶びたい。(128 頁)

以下、同特輯のラインナップを紹介していく。陸軍報道班員・尾崎士郎「戦場読書」(付・田中佐一郎画「戦場にて(パターン半島)」)では、標題通り戦場での読書体験が綴られ、《私は一兵卒に安住する覚悟を「花伝書」の中から得た》(3 頁)、《「花伝書」は期せずして私の戦陣訓になつた》(4 頁)と、日本の古典に戦時下における生／死の指針が見出されていく。陸軍報道班員・石坂洋次郎「帰還して」(付・猪熊弦一郎画「戦の後(コレヒドール)」)では、《戦争及びそれに伴ふ国民生活の変化は、激烈深刻なものがあり、これを文学的な体験として消化するには相当な時日を要する》(14 頁)として、帰還後の所感として、特異な体験の文学作品化には時間が必要だという見通しが示された。陸軍報道班員・大江賢次「収穫ノート」(付・江崎孝坪画「大宮島明石通(旧グアム島)」)で大江は、《きびしい軍律の下》での《集団生活》が《大変いゝ葉になつた》(23 頁)として、《生死の境に在る集団生活で、ごまかしも何も利かない、掛値なしの自己をむきだしにして永らく暮し、いひやうのない複雑な長所短所を発見することが出来た》ことを《絶好の恵まれた機会でもあつた》(24 頁)と意味づけている。さらに、そこから展開されていく南方体験に即した作品執筆について、大江は次のように述べている。

南方から帰還するとまづ誰でもが訊きたがることは、南方の自然風物であるが、それに答へながら僕の心は何か物足りないもどかしさを感じる。〔略〕軍事的なこと、政治的なこと、経済的なこと、その他ありとあらゆる問題が群がつてゐる中に、いかにも賢さうにそれらの推移をあしらつてゐながら、さて肝心のおのれに就いては心を致さぬやうなことはありはしないか。〔略〕敵は海の彼方にばかりゐるのではない。おのれの魂の奥深く巢造つてゐるのだ。文学も、かうした時代には、やゝもするとめまぐるしい事象にのみ捉はれて、題材主義になり易いものだ。題材のみは堂々としてゐながら、蟬のぬけがらみみたいな内容空虚な作品が幅をきかす。そんな体裁一点ばりのものにつられてたまるか。僕たちは大いに協力して戒め合はなければならぬ。(26頁)

戦争それ自体の出来事性や南方各地の異国情緒（に頼った題材主義）ではなく、文学者たるもの、特異な経験をへた《おのれ》を省察し、そうした《自己》こそを作品へと展開していくべきだという大江の反省は、帰還した南方徴用作家の作品をめぐる（賛否双方の）評価軸として、同時代の文学場においてもひろく共有されていく。陸軍報道班員・小田嶽夫「船中日誌——十二月八日まで——」（付・栗原信画「爆弾穴と白壁の家（昭南市近郊）」）では出航以来の日誌が公表されたが、まずは次の一節が注目される。

〇月〇日。

朝七時起床。午前中ねころんで読書（大阪で買った「フランシス・ザビエー小伝」）午後一時〇〇着。東京出発前遺書を認めておく筈だったのが、目の廻るやうな忙しさのため果せなかつたので、ここで日記帖の後ろの補遺の欄に「妻に与へる言葉」を書く。現在の自分の心境を述べ、次いでまさかの場合の処置に及ぶ。二頁余り。書いてしまふと何かほつとして気持落ちつく。(28頁)

ここには、先の尾崎や大江と通じる、南方徴用作家としての任務を命がけで行おうとする文学者の覚悟が言明されている。さらに同日誌には、第一次徴用作家共通の経験である、船上で迎えた太平洋戦争開戦日の様相についても、次のように記録されている。

十二月八日。

午前八時朝食の際、突如六時に日米交戦状態に入つた旨の報道（ラジオニュース）あり、全員異常なショックを受く。食後甲板へ出て見ると、五六千米北に無数のジャンクの影が見える。船は〇〇沖〇〇海里（日米開戦の報の後ずつと〇〇側へ寄つたのだと）のところを航行してゐるといふ。空は暗く曇り、海はまるきり鉄色をしてゐる、何となく不気味だ。船が速力を速めたのか船側の波が大きくなつてゐる。

正午過ぎラジオニュースあり、アナウンサーが宣戦の大詔を読み、次いで東條首相の演説あり、僕等かたまつて肅然と聞く。演説終るや、詩人にして陸軍少尉の山本和夫君「大日本帝国万歳！」を叫び、衆皆これに和す。

間もなく攻撃状況に関して刻々ラジオニュースが入つたが、最初にマレー半島上陸敢行のニュースあり、非常な感激に駆られて皆々思はず拍手す。(30～31頁)

掲載誌の発表時期を考えれば、こうした記述は一年前の開戦を振り返る契機にもなったと思われる。あるいは、陸軍報道班員・上田廣「六〇一号室——「マニラ日記」のうち——」（付・向井潤吉「サマル伽藍（バタアン半島）」）もやはり日記だが、こちらでは次のように文化工作の様相が記される。

食事後、火野君は原稿をもつて本部へでかけ、私は陣中雑誌「南十字星」の編集部へでかける。自動車がないので、宿舎の前でカロマダを拾つて乗る。風がはげしくビショ濡れになる。しかし、カロマダの馱者は呑気なもので、平気で馬の尻をたたきながら、大声で、エイッ、ホオッ、を囀鳴つてゐる。たのしんでゐるやうである。

一日、編集部で暮す。編集部は、「マニラ新聞」のひとと同じ部屋だが、「マニラ新聞」は、近く「東日」「大毎」の経営になるだらうと云ふ話をきく。(63 頁)

《街でビルマ人の子供の走り高跳びの遊戯を見た》(68 頁)という現地の様相から書きおこされた陸軍報道班員・高見順「子供の遊びその他」(付・中山巍「バリー島所見」)では、石坂、大江とも通底する、文学者として書くことと自己への省察が、次のように展開されていく。

無に帰さうとする自己を、他のうちに生かさうとして、ものを書く。永遠に生きようとする自己を誤りなく伝へようとして、ものを書く。これはいづれも自己中心的な考へ方。

自己表現、自己拡充としての文学や個人主義的文学観である。

さういふ考へ方からして、他に与へるものを書くといふのでなく、——死に直面しつゝ、死を超越して、生ある限りは、何ものかを他に寄与しようとして、ものを書く。

これは所謂功利主義的文学観といつた、なまやさしいことではない。さういふ仕事を尊敬したい。(70 頁)

ここまでが、南方徴用作家による創作ではない随筆・日記等に現地スケッチを添えた文章だが、ゆるやかな共通点として、文学者としての戦争認識と、そうした条件下での自己省察が書かれていた。

くわえて、『文芸』の特輯には、小説として寺崎浩「鞭」、北原武夫「帰路」、そのほかにも清水幾太郎「ラングーン日記抄」、海軍報道班員・間宮茂輔「雲の上」、陸軍報道班員・山本和夫「詩 朝日——緬甸戦線にて——」が並び、さらに丹羽文雄・火野葦平「対談 決戦と文学」が掲載されている。

第二として、特輯「帰還作家報告」(『三田文学』昭 18・2)がある。この特集は、掲載誌の和木清三郎「編輯後記」で次のように紹介—意味づけされていた。

▽本号は軍報道班員として徴用され、俱さに大東亜戦の重要性を体得し、近く帰還したわれわれの同志の所謂「現地報告」を特輯した。然し帰来日も浅く、多忙と疲労とのため、どうしても締切までに執筆出来なかつた方も二三あつたのは残念であつたが、何れも生々しい彼地の現状を報告してくれた事はあるがたい。向井画伯にも多忙中殊に執筆を願つた。金崎画伯は山本君が原稿と一緒に送達してくれたものである。(94 頁)

ラインナップを確認しておけば、倉島竹二郎「ブルジョア宣伝行」、柴田賢次郎「ファイリツピンの出版文化」、向井潤吉「マニラの墓地(文と絵)」、大江賢次「ボロボドール紀行」、山本和夫「熱帯にある四季」、金崎晴彦「ビルマの女(絵)」となっており、従軍作家にくわえ画家の文と絵も掲載された。

第三として、結果的に特集の体裁に近づいた『文学界』(昭 18・2)がある。掲載誌の河上徹太郎「文学界後記」には、次のような紹介—意味づけがみられた。

今月は帰還作家が期せずして力の籠つたものばかり書いてくれた。彼等の仲間が帰還後発表する夥しい文章を読むと、現地で得た印象の固化化して胸にわだかまつてゐるものを、何かの溶液で溶かして流し出してゐる感じがある。つまり、発表舞台の殆んど無意識的な制約が、重大な影響を文

章に及ばしてゐるのだ。文学界がその意味で精純な溶液として役立つことを期待してゐる。(144頁)

随筆としては北原武夫「ジャカルタ入城日誌」、寺崎浩「馬來の音楽」、創作としてはいずれもフィリピンに関する火野葦平「バグサンハン教会」、今日出海「比島従軍」が並んでいる。

Ⅲ-2

こうした三誌に代表される帰還作家の成果に対して、少なからぬ反応が同時代評で示された。

雅川滉は「文芸時評②帰還作家の作品」(『東京新聞』昭18・2・6)において、『まづ最初に帰還作家の作品』にふれ、特に改造社(『改造』と『文芸』)の力の入れ方に注目し、次のように論じていた。

作家と戦争とに横たはる問題は、単に如何にして戦争を描くかといふことにあるよりも、戦争に直面して作家の目が何に注がれ、何を貫いたかといふことにあるとわたくしは思つてゐる。

戦争といふ異常事に直面して作家の内面がどういふ反応を示したかといふことに、一切の問題がある。それを措いて、単に戦争を題材に選ぶといふことにとゞまるならば、体験も十分ではない〔〕従軍記者的な観察だけでは内面に深く喰入ることは到底出来ないから、傑作の誕生はきはめて困難となる。(3面)

ここに示されたのは、本稿でもしばしば論及してきた、南方徴用作家としての戦争体験を作品化するには、自己の省察を十分にへるべきで、そのためには時間が必要だという評価軸である。同様の見解は、次に引く無署名「文芸主潮」(『文芸主潮』昭18・3)においても示された。

第一線で皇軍将士と生死を共に活躍された作家達が大方帰還した。さて、そこで皆一斉に現地報告をもたらしてくれたが、今の所まだどれをみても極限に生きた彼等が従来の自己をどのやうに修正しなければならなかつたか、ひたすらさうした自己修正乃至自己改革の経過を十人十色に語つてゐるにすぎぬ。

昨年一ヶ年の文学界の寂寥は彼等の不在の故だと考へる人もあつたのだから、帰還作家達はもとのもくあみに返ることなく、逞しく改革された自己の立場から、大いに活躍すべきである。(33頁)

また、自身も南方徴用によってマレー方面に従軍した豊田三郎は「戦争文学私観」(『新潮』昭18・3)において、『戦争文学とはいはづらに物めづらしい異国の風俗をならべるものでもなく、敵味方の兵器や戦術について喋々するものでもない』、『戦争文学は事変の詳細な報告ではなくて、事実のうしろにある精神に属するものの表現でなければならない』(49頁)と断じ、次のようにつづけている。

今日、われわれが真の戦争文学を打ちたてなければならないならば、それは文学者としての矜持と信念とをはつきりと持つことである。そしてまた性急であつてはならない。事実の驚異と文学的な感動とを徐々にひきはなすためには相当の時日を要する。われわれは今日の戦争をむしろ終生の文学的な仕事とすることができるのである。(50頁)

もとより、次に引く森山啓「文芸時評 若々しさの必要」(『新潮』昭18・3)のように、完全な満足とはいえないまでも、南方各地における経験に即した作品に一定の評価を示す同時代評もあった。

帰還作家の今月の随筆や小説を懐しい気持で読んだが、なほ今後、力作を書いてくれるように祈らずにをれない。尾崎士郎氏の「戦場読書」、石坂洋次郎氏の「帰還して」をはじめとする随筆（文芸）や、今日出海氏の「比島従軍」（文学界）、北原武夫氏の「帰路」（文芸）などの小説から、真剣の境における生命の美しい緊張感を偲んだ。（79頁）

あるいは、「戦記と文学——従軍作家論——」（『文学建設』昭18・3）の東野村章ように、《この前古未曾有の戦ひに際して、一部の作家が、報道班員として大々的な一つの任務を担つて従軍した》ことにふれ、《作家の技術や経験が、戦争の一翼を担ふといふことは、作家にとつて光栄なこと》（19頁）だと、文学者の社会的有用性を強調する一幕もあった。とはいえ、文学場の評価軸の大勢は、本稿で検討してきた、帰還作家の体験を作品化するには相応の時間を要する、逆にいえば帰還後すぐに発表されつつある作品群には拙速のきらいがある、というものであった。東野村も、次のように言表している。

最近になつて、帰還して来た作家もぼつぼつ増えた模様である。が、まだ、経験や衝撃によつて創作の上に影響した何らかの表れは見られてゐない。創作といふものゝ深さは、作家の経験や思索がたゞちに形をもつて表れてくるものではないことは認められていゝことであらう。（19頁）

こうした評価（軸）は、ある意味では帰還作家擁護としても機能するが、同時に、体験を自己省察を経て深められない、あるいはそのための時間を準備できない文学者への批判としても作用する。それでも、帰還作家（と南方徴用の成果としての各種作品）への小さからぬ期待も文学場には確実にあった。そのことを端的に表明したのは、伊藤整「戦争の文学」（前掲）における次の一節である。

大東亜戦争始以来一年間に南方の戦線にあつて挺身労苦した作家たちが、昨年の暮頃から目出度く帰還して、作品を発表しはじめた。その一年間、内地にあつて静かに生活してゐた私たちは、この作家たちの労苦に対して深く感謝と敬意をささげると共に、またこの大戦争の第一線における感動を身をもつて受けたことに対する羨望をも禁じ得ない。

大きな期待を、私は作家たちの帰還に、また作品発表に対して抱いてゐた。またこれから発表される作品に対しても抱いてゐる。少くとも文学精神の上で相互理解の可能性を持つてゐる多くのこれ等有力な作家たちが、戦線で得來つたものこそ、私たちが今もつとも聞かうと欲するものだからである。（51頁）

さらに伊藤は、《この度作家たちが経験したやうな長い旅、雑多な、心をちらす事情ある土地での滞在中では、よほど精神の集中力を持つてゐなければ、自分の心とまっすぐに向ひ合つて暮せるものではない》（55頁）と想像し、《この重大な体験が作家たちに変化を与へてゐないといふことは考へられず、それはやがて、もつと後に、徐々にしかも強く現はれるにちがひないと、考へかつ期待する気持ちになつた》（56頁）と、南方での《重大な体験》が自己省察を経て作品化される時を待つ態度を示した。

こうした期待は、「文芸時評【作家と体験】」（『文芸』昭18・3）の上林暁によつても示される。昭和18年の文学場について、《今年になつて、一月の話題は島崎藤村、谷崎潤一郎二家の長篇だつたし、二月の話題は、南方に転戦して帰還した報道班作家の文章であらう》（20頁）、《この二大家の労作が評判になつてゐる一方、国家の要請に應へて南方に戦つた作家達が、筆を揃へて、実戦談に見聞記に論策に、生ま生ましい文章を綴つたことは、本年初頭におけるもう一つの、特筆すべき文学現象》だと位置づける上林は、《その〔帰還作家の〕文学的構想においては、色を議論もあるやうだが、それは寧ろ今後に俟ちたく、差し当り、報道的成果や貢献については、改めて贅言するまでもなく、各報道班作家の

任務が十分果されてゐることと信ずる》と、報道の面に限って評価を示す。その上で上林は、火野葦平「敵將軍」にふれて《非常に渾然とした好短篇であつて、このやうな作品が現はれるといふことも、従来の日本の文学では想像されないことであつた》と評し、次のように徴用作家への期待を表明する。

そのやうな作品〔「敵將軍」〕を見るにつけ、この際想像を逞しくすれば、南方に行つて、異邦の「血と土と心」（阿部知二氏の言葉）に触れた人達によつて、日本の文学に新しい意匠が導入されるきつかけが作られるのではないかと考へられるのである。〔略〕勿論、新しい意匠と言つても、単なる異国情緒では意味をなさず、軽佻浮薄が持ち込まれては困るけれど、報道班員たちは、すでに一家をなした人達ばかりであるし、日本人の心を持つて戦争に従つた人達であるから、もたらされるとすれば、健全な意匠であることを信ずる。（22 頁）

もちろん、ここで示された期待は文学場の評価軸同様、今後に関わるものだが、上林は『文芸』特輯中の高見順「子供の遊びその他」と小田嶽夫「船中日誌」における死に対する態度に注目し、《この行動人の単純率直さを身につけたことが、報道班作家のもつとも大きな強味ではないか》という理解を示すと同時に、《単純率直な行動人から、複雑微妙な文学の世界へ、如何に還つてゆくかといふこと》を《今後に残された問題》（23 頁）として提示してもいた。

具体的な作品評に関しては、徳田戯二「文芸時評 文学も決戦で征くべし」（『文芸首都』昭 18・3）が、前月号掲載の作品を対象として、次のように総評している。

国を挙げていま決戦が戦ひ抜かれてゐるとき、文学だけが決戦から洩れてゐられるわけではない。文学も又決戦の期に突入したのである。然し未だ二月の九作品〔上田廣「雨期」（改造）、火野葦平「敵將軍」（改造）、辻勝三郎「雁わたる」（文芸首都）、伊藤整「病歴」（新潮）、竹村八哥「響葫蘆」（新潮）、中谷孝雄「母」（新潮）、西辰夫「潮流の唄」（文芸首都）、横光利一「旅愁」（文芸春秋）、中島敦「弟子」（中央公論）〕からは決戦の切実な士魂（作家精神）は、明確な形をなして読者へは伝はらない。

その上で徳田は、《流石に前線作品である雨期（上田廣氏）敵將軍（火野葦平氏）の二作品からは、東洋の再生に伴ふ現代悲劇への民族哀愁を共感することが出来るし、文学の本質が良素材によつて一層光りを加へると云ふ実証を与へられる》として、帰還作家である上田と火野の作品に注目する。「雨期」について徳田は《民族愛の一面を示したものととして日本人特有の美質を示した作品として、新しい意味に於て高く評価されるべき作品》（35 頁）だと絶讃した。また、「敵將軍」については《民族小説として佳作》と評し、《ブニアンの町に住んでゐる昨日迄米比軍の指揮者として戦つてゐた將軍がタルラクの激戦の後オオドネル俘虜収容所の捕虜となり日本軍の厚意ある取扱の下に新比島の黎明を知り新比島建設に挺身する病將軍を取扱つた短篇》（35～36 頁）だと紹介していた。

雑誌 2 月号掲載作品の中では、火野葦平「敵將軍」が帰還作家の成果として圧倒的な支持を得ていた。《帰還作家の作品も若干眼を通したが、やはり地味だが火野葦平氏のゆき方が小説家らしく好感が持てた》という「国土と文学——文芸時評——」（『文芸新潮』昭 18・3）の市川爲雄は、《火野氏は報告文学の中にも小説性を努めて生かそうとし、それが所々に露れてゐる》（31 頁）と論じて、報告をこえた文学性（作家性）を火野作品に見出している。《南方に派遣されてゐた作家たちが帰還したため、今月はそれらの作家たちの書いたものが多く目についた》（13 頁）という鎌原正巳は「文芸時評」（『早稲田文学』昭 18・3）において、『文芸』特輯について《誰もまだ荷造りを解いたばかりといった恰好で、本格的な仕事をしてゐない感じだ》（17 頁）という感想をもらしていた。ただし、帰還作家作品で

ある「敵将軍」については個別に論及し、火野が《終始暖いいたはりの心をもつてこの老将軍をみつめてゐる》ことにふれ、その読解成果を次のように意味づけながら高く評価している。

日本人の持つてゐる人情の美しさがなかつたならば、おそらくはこの老将軍の悲しい心に触れることはなかつたであらう。いひかへるならば、この作品に描かれてゐるカピンビン将軍の人間らしい姿は作者が将軍を通して日本の心を表現してゐるからであらう。(16 頁)

ここで鎌原は、「老将軍」を小説として扱っているが、少なくともモデル小説として同作を捉え、実在のカピンビン将軍と《作者》＝火野葦平の交流を実体的に想定し、その火野が代表する日本人の《人情》－《日本の心》に注目して高く評価している。つまり、南方徴用作家として帰還直後の作品でありながら、「老将軍」には火野葦平の人間性までが読みとられ、それゆえ高く評価されているのだ。その意味で「老将軍」は、「朝暮兵」と並んで同時代の評価軸を突きぬけた作品だったといえる。

してみれば、帰還した南方徴用作家に求められた作風とは、一面私小説的なものでもあったということになる。しかし、南方徴用作家に期待された文学的営為（の一部）は、私小説をこえたモチーフの拡張であったはずだ。こうした評価軸が一部にあったことは、佐々木基一「戦争文学について」（『日本評論』昭 18・3）から確認できる。佐々木は、《火野氏の最近の作品『歩哨線』とか『敵将軍』など》について《確かに或る勘どころを捉へてゐる》(94～95 頁)として、両作品を次のように論評している。

『歩哨線』は外国植民地の兵隊に対する、わが国民の微妙な気持を通じて、この度の戦争の一つの性格に迫つてゐる。だが直接のモチーフを、火野氏は飢ゑた比島兵を殺さずに見逃した歩哨の悩みに置いてゐる。そのために、この折角の主題も発展性を喪つてゐるのである。『敵将軍』では、部下に置去りにされ、捕虜になつた比島人の師団長、病み寝、うらぶれた敵将軍の像を描いて見事だが、こゝでもモチーフは非常にちづばけな、殆んど無意味と思はれるところにある。(95 頁)

こうした評言を支える佐々木の評価軸は、《私たちが所謂戦争文学に期待するところは、外でもない、従来狭くまとまつた世界しか猫かなかつた多くの文学を、戦争といふ巨大な、緊迫した、行動や事件に充ち満ちた現象を描くことによつて、大きな客観世界に連れ出すこと、即ち、現実を包括的に描く方法を確立して行くことにある》(95 頁)という一文に、明確に示されている。しかし、南方各地の異国の風景や戦場の様相が《大きな客観世界》だとして、それらを前面に打ちだした作品を書けば、題材主義に陥った、自己省察の欠けた文学者として批判されることは容易に想定される。

総じて、太平洋戦争開戦後一年のうちに、文学場においては評価軸の再編成が進み、帰還した南方徴用作家にはその体験を生かした、太平洋戦争を戦う日本にふさわしい文学（活動）が求められると同時に、当の文学者には、外部の題材／内部の自己に対する真摯な対応が求められていくこととなった。

IV

昭和 17 年末～翌 18 年年頭にかけて、帰還した南方徴用作家の作品が一斉に発表され、それらおよびそれらの同時代評を通じて、モチーフとされた南方各地ばかりでなく戦時下における文学者－「私」のあり方についても、同時代の文学場で広く議論されていった。こうした動向は、以後もつづいていく。

特集「南方圏文化工作私見」（『新潮』昭 18・3）は、掲載誌の無署名「編輯日録」で次のように紹介－意味づけされた。

▼報道班員として南方に派遣された作家のほとんどが帰還した。そして、戦争について、またはその地の文化について論じた文章を発表してゐる。何れも示唆あるもののみである。本号では、それらの帰還作家をわづらはして、「南方圏文化工作私見」といふ題下で、それぞれの任地での見聞をもととしての文化工作についての私見を語つていただいた。ここに説かれてゐる諸家の意見は、その一々が肯綮にあたるものをもつてゐるやうにおもはれる。そして、われわれの南方圏の文化に対しての認識は、さらに深められるとともに、従来の認識をあらためてかからなければならぬことも痛感する。さういふ点で、今後の作家の仕事の領域は、よりひろくなり、より深くもなつていかなければならないやうにおもはれる。(128 頁)

ラインナップとしては、榊山潤「文化的色彩に就て」、北原武夫「ジャワの文化工作」、小田嶺夫「ビルマ文化工作に関連して」、上田廣「思ひ出すまに」が並び、特集外には高見順「芸術の背景その他」も掲載されていた。その高見は同月、ビルマ体験をモチーフとしたこの時期の帰還作家による代表作として、この時期以降も評価の高い「帰つての独白」(『改造』昭 18・3)を発表している。

同人雑誌においても、上田廣・里村欣三・柴田賢次郎・金親清／田中英士・矢崎麟也・朝谷耿三・遠藤文仁・滋田一衛・高松善次郎・岡崎義弘・長谷健「座談会 大東亜共栄圏と日本文学」(『新作家』昭 18・5) が催され、フィリピンから帰還した柴田は自身の体験に即して、次のように発言していた。

支那事変に応召し、兵隊として行つて帰つてみて、これは或は大東亜戦争になつてもさうですが、帰つてきて同人雑誌や文芸雑誌なんかかためて考へてみると、表現なんか可成見事な、そして行間には芸術的なものが流れてゐると思へるけれども、相当の作品ではあるけれども、今の時代にかういふものを書かなければ不可ないのか——僕たちは表現は下手だけれども、もつと他のものを書きたいといふ、そこの喰ひ違ひがあると思ひます。それからまた、立派な芸術を必ずしも否定するのではない。谷崎氏のああいふ作品が発表されることにも希望を持つてゐるのですが、自分自身の、報道班員として行つて帰つたものの気持から云つて、此の時代の文学として、この時代のことが身に應へて、それを表現するのが文学者の使命ではないかといふ考へを、どうしても強く持ちます。(15 頁)

ここで柴田は、《此の時代の文学》として谷崎潤一郎「細雪」のような高い芸術性を誇る作品よりも、たとえば戦争や戦場(体験)をモチーフとした時代性を重視すべきだという立場を、《文学者の使命》として位置づけながら鮮明に示していく。もっとも、当時、南方徴用も含めた何かしらの戦争体験を経た文学者ばかりというわけではなく、文芸誌の目次がそれらで埋められるということもなかった。

それでも、《「戦争と文学者」なる題下の軍報道班員として活躍した作家の所懐》(無署名「編輯日録」,『新潮』昭 18・5, 176 頁)として、文芸誌上で特集「戦争と文学者」(『新潮』昭 18・5)が組まれる。そこには、浅野晃が「戦争と文学者」で示した、次のような極端な立場も当然のように示された。

皇軍の威儀の現成が、すなはち聖戦の具体の姿であつて、そこに御稜威が、あまねく光披するのである。かやうな点の認識を深めたといふことを以てしても、陸軍の宣伝班や海軍の報道班に、文学者が編入されて従軍したといふことは、意義の大きいものがあつたことを、特記せねばならぬ。(69 頁)

しかし、太平洋戦争期の文学(者)のすべてが、こうした思想に塗りつぶされていたわけではない。また、本稿で検討してきた、帰還した南方徴用作家作品に対する評価軸についての議論も深められてい

く。日中戦争以来、戦争に関わってきた火野葦平は、「大いなる反省の時機」で次のように述べている。

南方の戦場にあつて私が感じたことは、この戦争を今度はどんな風にか書かうとか、これからの戦争文学はどうでなければならぬといふやうなことではなかつた。私は戦場では歴史のなかにある自分の位置を見きかはめることと、その責任を反省することとで一所懸命であつた。それを文学の方法と結びつけて考へることのできるやうになつたのは、ずっと後のことである。(64 頁)

ここで火野は、戦場での体験と、それを自己省察を経て《文学の方法》へと架橋していく過程を分節して捉え返し、そのあいだに時間の必要性(時差)を見出している。同様の感覚を、よりゆるやかな速度-長いスパンで捉えたのが、次に引く小田嶽夫「宣伝班文芸家として」である。

結論として私たち作家(少くとも私)は宣伝班といふ建前に於ては、無くてはならないといふ特殊技能者ではなかつた。(新聞記者、映画撮影家、写真家などと比べると非常にはつきりする)

それにもかかはらず作家が戦争に参加させられ、しかも書くことでない他のさまざまな任務に就かされたといふことは、その場かぎりの使用価値を外にした、作家の職能の永い将来にかかはるものに大きく加へられるものがあつたことは大きな事実である。

国家が、軍が作家を宣伝班員に加へた目的が奈辺にあつたかを私は知らない。しかも自分としてはこの右の大きな事実だけを尊重したい。

これがあるためにこそ作家の戦場に於ての一見あいまい極まる立場は、逆に何等あいまいでない確固、鮮明な立場に改まるやうに思はれる。(66 頁)

戦場報道に重きを置いた報告文を想定するならば、小田の言明をまつまでもなく速報性や正確さにおいて文学者がジャーナリストなどの専門家に劣ることは明らかだろう。そうした現実を前にして、小田は、文学者が宣伝班員に必要とされた理由を《作家の職能の永い将来にかかはるもの》にみている。別言すれば、文学者の南方各地における体験は短期的にではなく、中長期的にこそ何かしらの成果を出すことを期待されてのことである、少なくとも小田はそう感じるに足る体験をしたということである。

してみれば、文学場においては帰還した南方徴用作家への漠然とした期待の中、帰還作家サイドも受容サイドも、南方での特異な体験について時間をかけた自己省察を経て、よりよき時代の文学を創るべきだという漠然とした理念は共有されつつあった。しかし、それはあくまで理念であつて、それが作品-評価軸として定着していくまでには、それこそ時間が必要だったようである。以下、南方徴用作家としてシンガポールへ派遣された井伏鱒二をめぐるエピソードを紹介して、本稿の展望にかえたい。

井伏鱒二がシンガポール体験をモチーフとした「紺色の反物」(『改造』昭 18・5)を発表した翌月、田宮虎彦は「報道班員その他——文芸時評——」(『文芸主潮』昭 18・6)で同作を《井伏鱒二の井伏鱒二らしさを美しく結晶させた、いはゞ好箇の短篇と呼びたい作品》だと絶讃する。ここで問題にしたいのは、それにつづく次の一節である。

読後、私は、何か愉しい思ひに心ひたされながら、純朴なる南方諸民族の日常をはるかに思ひやつたのであるが、それは暫くおくとして、併せ読んだ、同じく帰還作家の、新潮五月号尾崎士郎「船」文芸五月号石坂洋次郎「一月十三日」と共に、読後あるかすかなる不満の念を禁じ得ぬものがあつた。それは作品そのものに対する不満といふのでなく報道班員といふものの任務に対して南方に派遣された作家達がどの様な解釈をもつてのぞんで来たか、又、現在もさうした嘗ての自分達の任務に対して、どの様な責任(文学的な)を感じてゐるかといふことに、若干の不満のあること

を述べてみたいと思ふ。(83 頁)

田宮は、《文学の中に政治が、政治の中に文学が、それぞれ含まれてゐるとでも言ふべき、さうした関係のもとに、私は、文学としての記録作品を考へてゐたい》のであり、《作家たる確たる自覚を自己の心に持つことによつて、即ち、作家の眼で見、作家の耳で聞きすることによつて、戦争の現実を文学的に把握することが出来る》(84 頁)と考えており、南方徴用作家に次のような期待－課題を提示する。

かくて、把握し得た現実を、信念に於て整理することに於て、作家は誤つところなく、戦争を——といつて範囲の限定される惧れがあるとすれば、民族の偉大なる歴史的瞬間を、後世につたへる任務を完遂し得るのである。

かゝる作家の本質的任務を自覚するならば、従軍せる作家は、各個人の自己の問題として、自己の記録作品を執筆すべきであることは当然であらう。(84～85 頁)

つまり、田宮が読んだ限りにおいては、「紺色の反物」、「船」、「一月十三日」の三作はいずれも現地の記録としては興味深かったが、《作家の目一耳》を通じて《自己の問題》として深められていない点があり、そこに不満を表明していたことになる。ただし、難しいのは、こうした評価がどこまでの広がりをもっていたのか、文学言説が激減していた当時の状況下では、判然としないことである。というのも、岡田三郎・高見順・伊藤整「五月の小説——鼎談月評——」(『新潮』昭 18・6)では上に指摘されたギャップを埋めた作家として井伏鱒二が話題とされていたのだから。高見に、次の発言がある。

僕は井伏鱒二氏がシンガポールへ行つたと聞いたときに、初め井伏氏はどうするだらうかといふ気がしたのですがね。所謂現地と井伏文学、水に油のやうな気がした。ところがこの小説を読んで見ると、どうするだらうと思はれてゐた井伏鱒二がちやんと一応自分で以て片をつけたといふことぢやなく、実に井伏鱒二にピッタリ合つてゐる所へ行つたもんだなと思つた。(61 頁)

これをうけた伊藤も、おそらくは井伏鱒二「ゲマスからクルーアンへ」(『文芸春秋』昭 18・1)について《作家がああいふ風に現地に行つて現地のものを見て観察して十分消化して文章が対象とちぐはぐにならない、それから形式化してしまはないやうに対象と作家が巧く合ふといふのは作家の力だと思ひましたね》(61 頁)と、絶讃しているのだ。これを、井伏鱒二という作家の特異性とすることもできようが、南方徴用作家としての体験をすでに十分に血肉化し得たのだとみることもできるだろう。

こうした現状が難問として共有された文学場において、多くはない実作と批評言説とによって、南方徴用をはじめとした戦争に関する諸体験をいかに文学化していくか、議論はこの後もつづいていく。

注

- (1) 都築久義「作家の徴用」(『愛知淑徳大学論集』昭 61・3), 24 頁。
- (2) 神谷忠孝「南方徴用作家」(『人文科学論集』昭 59・2), 前掲注(1)・都築論文, 奥出健「徴用作家の戦争——ビルマ、マレー方面班を中心に——」(『近代文学研究』平 3・5), 木村一信・神谷忠孝編『南方徴用作家——戦争と文学——』(世界思想社, 平 8) 参照。
- (3) 木村一信「大東亜共栄圏と文学者」(時代別日本文学史典編集委員会編『時代別日本文学史典 現代編』東京堂出版, 平 9), 165～166 頁。
- (4) 木村一信編『南方徴用作家叢書 ジャワ篇(全 15 巻)』(龍溪書舎, 平 8), 木村一信・竹松良明編『南方徴用作家叢書 ビルマ篇(全 14 巻)』(龍溪書舎, 平 22) ほか参照。
- (5) 土屋忍「研究動向 南方・南洋」(『昭和文学研究』平 25・9), 75 頁。

- (6) 亀井秀雄「他民族体験と文学非力説」(『日本近代文学』昭45・5), 2頁。
- (7) 拙論「太平洋戦争開戦後における文学者の使命－役割」(『太平洋戦争開戦後の文学場 思想戦／社会性／大東亜共栄圏』神奈川大学出版会, 令2) 参照。
- (8) 神谷忠孝「序論」(『南方徴用作家——戦争と文学——』前掲), 8頁。
- (9) 拙論「文学(者)と思想戦」(『太平洋戦争開戦後の文学場』前掲) 参照。
- (10) 拙論「マレー・シンガポール攻略作戦をめぐる報道文」(『太平洋戦争開戦後の文学場』前掲) 参照。
- (11) 南方徴用作家に関わる作品リストが, 前掲注(1)・神谷論文に掲載されている。なお, 拙論「井伏鱒二『花の町』を読み直す——軍政下昭南市における「骨董」」(『世界文学』平30・12), 「軍政下昭南市における文化工作(日本語教育)一面——陸軍報道班員・井伏鱒二「花の町」を手がかりに」(『立教大学日本文学』令1・7), 「太平洋戦争と私小説——太宰治「新郎」／丹羽文雄「海戦」」(『国語国文』令1・10) もあわせて参照。
- (12) 尾崎士郎は日中戦争開戦後にも, 類似した設定の「ある従軍部隊」(『中央公論』昭14・2) を発表して物議を醸した。拙論「従軍ペン部隊言説と尾崎士郎「ある従軍部隊」——文学(者)の役割」(『日中戦争開戦後の文学場 報告／芸術／戦場』神奈川大学出版会, 平30) 参照。

※本研究はJSPS 科研費 JP20K00323 の助成を受けたものです。

Writers returning from the southern region

—Shiro Ozaki's *Choubohei* and Ashihei Hino's *Tekisyougun*

MATSUMOTO, Katsuya

Abstract

In this paper I illuminated the literary scene in early 1943. At this time, just before the start of the Pacific War, a literary man who was recruited by the Army and Navy and dispatched to the southern region returned to Japan and published various sentences (diary, reportage, novel, etc.). However, little research has been done on this subject.

In Chapter I, I summarized the previous studies and presented the problem concerns of this paper.

In the second chapter that follows, I first examined the remarks of literary writers who returned from the southern regions. In addition, I analyzed the contemporaneous evaluation of Shiro Ozaki's *Choubohei*, which is a topical work in the January issue.

In Chapter 3, I analyzed the texts of various genres, published in February 1943, by writers returning from the southern regions. First of all, I arranged the comments of literary people in round-table discussions and essays, and then analyzed in detail the contemporaneous evaluation of Ashihei Hino's *Tekisyougun*.

In Chapter 4, after summarizing the analysis results of this paper, we present the elements that were required of literary writers at the end of the Pacific War.